



ウエルネスからみた 母性看護過程＋病態関連図

評者・大月 恵理子 埼玉県立大学

看護の基礎課程にある学生たちに、母性看護学の事例を展開させる時、学生たちからよく問われるのは、「問題がない」「何をしたいかわからない」ということである。これは、母性看護学を座学で学びはじめ、演習として事例を提示した時もちろん聞かれるが、領域別実習を回ってきた学生が、母性看護学実習に臨む時にも聞かれることである。

それは、成人看護学や小児看護学等の実習では、基本的に疾患を持つ人を対象としているのに対して、母性看護学では、基本的にリスクの低い、正常経過をたどることが予測される対象を受け持つからである。健康問題を発見し、それを支援するという思考のままでは、母性看護学においては看護過程を展開することは難しいからであろう。健康度の高い妊産褥婦や新生児に対する看護診断を行なう場合には、「ウエルネス型」という考え方が必要となる。私たち母性看護学教員は、まずそのことを学生たちにしっかりと伝えなくてはならない。

本書は、その母性看護学実習において、対象を理解し、看護計画を立案しやすいように、多くの点で工夫されている。まず、各期の正常経過がコンパクトにまとめられた後、正常経過におけるアセスメントの視点がポイントを押さえて記述されている。アセスメントの項目立ては情報源によって分類されており、情報収集しながら系統的に遣

妊娠の正常経過と異常を ビジュアルで解説する1冊



佐世正勝、石村由利子 編集

定価 3,990 円(本体 3,800 円＋税 5%)

A 5 判／医学書院／2009 年

漏なく診断できるように組み立てられている。

そのなかで異常が疑われる場合は、それぞれの異常の項目を参照するようページも挿入されているため、すぐに関連ページを見つけ出すことができ、病態関連図も付記されていて非常にわかりやすい。また、異常に関しては、それぞれフローチャートが提示された後、「情報収集」「情報分析」「看護課題の明確化」「介入実施」「評価」と統一されている。さらに、それらが色枠でかたどられており、まるで PC 画面のウィンドウを見るように紙面が構成されていて、学生にとってはなじみやすく、

見やすい構成となっている。

実際に、母性看護学実習中の学生に参考文献として提示したところ、カラフルで大変見やすい、項目がわかりやすい、どんな視点でアセスメントしたらよいのか、次にどんな情報を得たらよいのかなどがわかりやすいという意見が出て、一番人気の文献となった。惜しむらくは、その厚さであろう。私も手にした時、びっくりするほどの厚みであった。もう少し薄いか、または2分冊のほうが、実習のために持ち歩くにはちょうどよかったかもしれないが、内容の充実のためには、やむを得なかったのであろう。看護学生の皆さんには一度手にとってご覧いただくと、その見やすさを実感できるかもしれない。